

昭和初期岐阜県に於ける木工による手工教育の実際（Ⅰ）

Fact of Handy Craft Education in Early Period of Showa Era Gifu

齊藤 暁子*・ 富岡 卓博**

キーワード 岐阜県手工, 中西忠節, 山下泰助, 木工動力機械, 郷土化教育

はじめに

本論文は、昭和初期における岐阜県と、特に飛騨での木工による手工教育実践を、当時の手工観と風土の中で考察する。高山西小学校の訓導「中西忠節¹」と古川小学校訓導「山下泰助」らの実践家を中心にその教育観を読み取り、彼らが実践してきた手工教育と地域の風土に密着した人間教育を明らかにしたい。また当時の教育界に問題として唱導した「郷土化教育」が、県下の図画手工にかかわって時代相としてどのようにとらえていたかも課題とした。さらに、昭和8年開催の岐阜県師範学校付属小学校での県下図画・手工訓導協議会の発表記録『図画ト手工』を分析することで、当時の尋常小と尋常高等小の8年間の手工教育のうち木工にかかわる内容を捉え飛騨の実践家との比較をする。

Ⅰ 手工教育の時代背景

Ⅰ-1 大正末期から昭和初期の我が国の手工教育観

大正15年の小学校令改正により、手工科が必修となった。手工は、職業教育から普通教育として位置付けることになったのである。このことにより、手工を取り巻く理論は、図画手工同一論、または、自由画教育運動を受けて創作手工等、理料的手工の流れだけではなく、多様な発展をする時代を迎えたといえる。

しかし、芸術教育として定着したとは考えにくい。現に山形寛によると²、彼自身が東京女子師範学校附属小学校に奉職していたとき、「ある日千葉県の某小学校長が、参観にきて『あんな面倒なのが必修科になってどうするんですか。その中また法令の改正があって、再び、加設科目になるのでしょうか。そうしてもらわなければかなわん。あんなもの本気でやる気がしない。』と放言した者もあつたくらいである。」と、当時の様子を記している。

大正15年4月22日付文部省訓令第10号の「小学校令及び同施行規則中改正の要旨並びに施行上の注意事項」をみると、以下のように記されている³。

近年国民の向学心の進歩に伴いて尋常小学校卒業者の高等小学校に入学する者年々その数を増加し、最近の統計に依れば其の割合百分の五十五に達するの状況なり、亦以って高等小学校が教育制度上重要な位置を占むるを知るに足らむ。従ってその制度を改善して之が充実を図ることは真に当今の急務と謂わざるべからず。義務教育年限の延長に就きて世上熱心なる主張あるに拘らず今尚これを實現し得ざるを遺憾とすれども高等小学校を改善し、地方の事情に適切なる教育を施すに至らば今後一層多くの入学者を収容することを得、義務教育年限延長実施の時期を促進し、更に円滑に之が実施を期することを得べく、又彼の相競うて中学校の門に走り、而も半途にして退学せざるを得ざるが如き者をして、初めより安じて高等小学校に來り学ばしめ中学校入学難の弊を救済するの一助たらしむことを得べし。

今回の改正が高等小学校の教育をして實際生活に適切ならしむことに力めたること前述の如しと雖も高等小学校は固より普通教育を施すことを本義とするものにして、尋常小学校に於けるよりも一層進みたる程度に於て道德教育及び国民教育に力を尽くす必要あり。(下線は筆者による。)

地域社会を支える人材として、実業を求める子どもに対しては、技術教育を施していくという姿勢

*岐阜県郡上市立牛道小学校 **岐阜大学教育学部

が顕著である。しかし、中学校に進学し、勉学に向かう上流もしくは都市部の子どもにとっては、徒弟制度のような教育は卑しく必要ではないという気風が強かったと考えられる。

その背景としては、米価の自由化や、地震、飢饉などによる、農村の困窮と其の更生に向けての政府の動きに関係するところが大きいといえる。大正12年には関東大震災が起り、米騒動もあいまって経済情勢もゆれていた。大戦後のデフレも安定せず、1929年にアメリカで始まった世界恐慌の影響を受け、デフレ傾向は一層拍車がかかり、日本の金解禁の政策によって、米価、繭価などにも影響を与え、輸出が減り、1931年からは、本格的な農業恐慌へと広がっていった。満州事変以後は五・一五事件直後、第26臨時国会から農村救済の請願が殺到した。政府は、「自力更生」を訴え、「農山村漁村経済更生運動」を実施していった⁴。

「日本木材工芸 第1巻」⁵をみると、農村の副業開発、芸術工芸品の促進によって、更生につながる多くの取り組みを知ることができる。ここには、岡山秀吉をはじめ、木工に関わる多数の研究者実践者が寄稿している。直接地域を支える確かな労働力と、地域による資源の最大利用と開発など、実業としての研究・実践が、木工というテーマで、教育から新技術、機械開発に及んで記述されている。この資料からもうかがえるのだが、手工教育は、実業教育として都市部より、手工を風土として必要としている地方での発展が著しいといえよう。「農村教育運動」「民芸」「農民による芸術」など、生活に密着した手工芸についての再評価と、価値付けが各地の実践を交えて取りあげられている。手工教育の定着と発展には、小学校令改正の背景にある社会経済政策の影響によるところが大きく、必ずしも芸術教育・情操教育としての座標軸ではなく、職業・実業教育として、社会経済更生と発展の急務の中にあっただといえるのである。

岡山秀吉の科学教育と発明・工夫を柱とする手工教育や「理科的手工」とは違い、芸術教育、児童中心主義を柱とする「創作手工」は、自由手工、芸術手工ともよばれ、石野隆らによって協会も発足された。石野は手工科の使命を「模索主義を排して、極力真の生命美に触れる創作に依ることが根本」⁶と述べた。しかし、本来手工には、どちらの要素もあり、分断したことによって、子どもを子ども扱いしたものづくりになってしまったと考えられる⁷。むしろ、子どもを全人的に考えると、「理科的手工」も生活者として必要で、大人が作り上げた、限定した「子ども像」の視覚文化や創作世界を作り出したとはいえないかと考える。また、当時の子どもが置かれている立場から、地域に労働力として出て行く子どもにとっても、進学し帝国大学を目指す子どもにとっても、情操教育として位置づいていかなかった。

I-2 大正期から昭和初期岐阜県師範学校手工科の実践

当時の手工教師が学んだ岐阜県師範学校の様子を記すことにする。

岐阜県師範学校手工科の教官は、東京高等師範学校から代々迎えられていた。伊藤信一郎⁸をはじめとして、千島久治⁹、鈴木孝英¹⁰らの考えを当時の資料¹¹から窺うことができる。大正から昭和にかけての多彩な教育思潮のなかで、多くの研究者・実践者が活発に手工教育説を展開していた。その中で、彼らは、手工の地位向上と、普通教育としての手工の位置付けに尽力し、芸術的手工より理科的手工を強く打ち出している観がある。

大正8年まで岐阜県師範学校に数年間在職した伊藤信一郎の手工科教育は、後に著される『工業大意』『手工教授学』に見られるように、目的の中心を普通教育の一般的陶冶に置かれることを説きつつ、実用的・職業的特質をもつ教科ゆえの工業的趣味の伸張を打ち出していたと考えられる。彼は、その学習環境を整えることを提案し、教育的手工の理念を、手工教授の目的、手工教材の選択にわたってより実践的に教育説を著した¹²。

伊藤の意思を継いだ後任の鈴木孝英の尽力もあり、動力機を備えた工作室建設が実現したのは大正12年であった。それ以降県内各地の小学校に、師範学校同様、動力機を備えた工作室建設が広がることとなった。

当時の様子を鈴木は、次のように記している¹³。

…五馬力モーター帯鋸機・鉋機・角孔機・ボール盤・木工旋盤・金工旋盤・送風機・動力用ミシン機・粘土焼成窯・等で大體完成させたのである。…(中略)…設備の充実といふことは、該科の振興上極めて重大であるといふことは今更いふまでもないが、其後の生徒の本科に對する努力が従来より倍加したことは事實である。…生徒の製作能力が數倍し、それが成績とか點數とかを超越しての作業であるから實に愉快である。…

また、伊藤は、東京高等師範学校に戻ってからも、昭和4・5年の文部省による中等教員に對する作業科及び実業科の夏期講習会を開き、昭和6年から9年まで4ヵ年繼續して臨時講習¹⁴を開くなどして作業科の普及に尽力した。

しかし、実践者達たちは、實際目の前にしている子どもに応じた、子どもに最適な教育を探求していくはずである。本研究で、筆者は、理科的手工の中に、創造的な部分を取り入れていく実践もあったのではないかと予測を持った。中西忠節らの実践のなかには、こうした取り組みがはっきりと現れていたのである。

次に、大正末期から戦争期までの飛騨における工作科の三羽鳥とされる¹⁵中西忠節、山下泰助、北平久次のうち中西と山下について、現在残っている資料から実践の様子を探ることとする。

II 中西忠節の実践

II-1 底流に流れる郷土教育の理念

明治37年に生まれた中西は、大正13年岐阜県師範学校本科二部卒業後、益田郡下原小学校、下呂小学校訓導の後、再び岐阜県師範学校専攻科に学び昭和2年3月卒業したのち、大野郡高山西小学校の訓導となった¹⁶。

「昭和二年三月、岐阜県師範学校専攻科第二部を卒業と決定したら、当時の高山男子尋常高等小学校の野村宗男校長が『専攻科卒業後は我が校へ来任し、理科主任となり、高等科を担当してくれないか。』とのことだった。

そうした若き高山西小時代の中西の手工への考えを知るのに、昭和6年3月号『岐阜県教育』誌投稿の「手工科の一考察」と題する小論にはっきり見ることができる¹⁷。

高山西小高等科の工業学級を担当した4年間の経験からの提言で、

中西はまず「製作は自発的態度ならしめたい」とし、教材の選定に、児童の趣味に合い、興味の乗る教材で、児童の環境や負担にも適応しているような内容を重要視していることが述べられている。この中西が抱いた児童中心主義の基本理念は、本論の課題の一つである「郷土化」に通底するとともに、その後の中西の教育実践に一貫していくことがわかる。中西のこの論文は、5頁分とかならずしも多くはないが、高等科手工教育全般について、児童の実態に沿って実践的かつ具体的提言として優れている。

例えば、ただ単に児童に自由製作させるとその作られるものが「狸」「達磨」「本立て」になってしまう、という実態から、「製図重視」によってそうしたことから脱却できないかとする。「本科においては決して無計画に行き当たり式の工作を為す習慣をつけることなく工作にいるに先だつて充分図の上に想を練る事が大切であると思う（傍線は筆者による）」と記している。単に直感による製作ではなく、案を十分に練り、図に何度も書き直し、いわば科学的に製作する態度に理科的手工といわれる所以があるように考える。

当時を知る西小学校第一期生、山田光郎¹⁸に会うことができた。中西が晩年暮らした家と程近い、現在も西小学校校下である職人の町にある指物の工房が山田の作業場である。中西の教え子で、国や県の名工百人の中にこの町の第一期生の中に三人が入っており、そのなかでも制作を続けているとのことでの紹介で山田に話を聞いた。山田は、当時の中西を「大変厳しく指導を受けた。自ら鉋の使い方等の指導をして貰った。一度家に帰ってからも、また学校へ行ってやるほど熱心であった。」と話

している。「手本となるものを先生が本の中から選んでその寸法で大作を作っていた。先生は、すべての技術に精通していて厳しく手ほどきを受けた。『工業大意』を教科書にも使っていた。」という。材料は、自身でアルバイトをして、自身で材木を買ってきて作るのだという。

Ⅱ-2 西小学校工作室建設

中西の功績として注目したいものに、西小学校での工作室建設がある。西小学校は、大正15年5月大火で焼失し、昭和4年新校舎に移った。そのころから、新校舎に工作室を増設する計画が実現していくこととなる。中西は次のように振り返っている¹⁹。

…さて話を改めて、野村校長は、人間教育、職業教育を重視され、新校舎の東に、理科室、作法室、医務室等を建設され、更にその北に、工作室の建設を計画された。当時の直井町長は教育に深い理解者で、野村校長の提案を採用されると同時に、関係教師をなるべく転校させず、充実した教育の進展を図るようにと言われたと聞いた。…私に工作室の計画を命じられたので、従来の室を、作品陳列室と塗装室に造り変え、その北つづきに木工室、機械室、金工室を建築した。そして、塗装室には、エアーコンプレッサーや排風器を、木工室には新工作台を十二台と十数人並んで刃物を研げる長い流しを設け、機械室には、自動送鉋、手押鉋、帯鋸機、旋盤機等木工に必要な十数台の機械を設置し、金工室には鞆、金属削機等を設置して工作教育の充実を念じた。…

このように工作関係の教室だけでも、木工室、金工室、機械室、塗装室、さらに作品陳列室と5室を数える。下の写真1の工作室にみられるように、工作台は十二台のほか、写真2の機械室は他校に類を見ない装備で、本格的な工場のイメージさえ受ける。次頁の写真3の塗装室はエアーコンプレッサーや排風器まで設備されていて、当時、飛騨産業などの地域の会社にもない機械が勢ぞろいし、会社から見学にきて、その後会社もコンプレッサーを購入したというエピソードも残っている。尋常高等小学校の子どもたちは、本物の機械を手工の授業で使い、また、指導者から、本格的な技術を指導されていたことになる。中学校に進学して帝国大学などを目指す子どもと違い、職人の子どもの多いこの町の尋常高等小学校では、求められている教育であったと言えるのであろう。実際職人や大



写真1 西小学校工作室の様子(中西提供)
丈夫な工作台3列12台で一斉に鉋かけ作業

工を受け継いでいった子どもも多く、のちに、国や県の名工に選ばれている人も幾人かいる。

中西の実践の成功した条件として、手工に最も適した職人の土壌があったということがあげられる。また、授業時間後も手工室を開放し、子どもに制作の場を与えた。職人の町の生活者としての子どもに極めて高い基礎を身に付けることを実現させていった。



写真2 西小学校機械室の各種工作機械
(中西提供)

動力を天井からベルトで得る方法で、奥に旋盤がある。右側機械は3人がかりで、操作介助2名による。手前1名が上下、奥の1名が左右へ移動のハンドル操作を行っているようにうかがえる。児童は、いずれもわら草履ばき姿。



写真3 西小学校塗装室での作業（中西提供）
左手壁面に、大型のコンプレッサーが配置され防塵マスクで塗装作業をおこなっている

『いいえ、自分ひとりで作りました。』と勇気を出して言ったことを覚えている。本当に先生は絶対手を出さず、厳しく自分で作り上げることをさせた。作品は、学芸会などで、販売され、その出来栄は有名で、土地の商店の主などが買って行って、現在でも、市内の薬屋には当時の生徒が作った衣装箆筒が大切に使われているという。山田も自分の最初の作品の茶箆筒を工房に据え、工具などの入れ物として大切に使っていた。「自分は、卒業後指物師の職人に弟子入りしたが、先生に習ったことは、今まで生きています。」と結んだ。

中西の実践の成功した条件として、手工に最も適した職人の土壌があったということがあげられる。また、授業時間後も手工室を開放し、子どもに制作の場を与えた。職人の町の生活者としての子どもに極めて高い基礎を身に付けることを実現させていった。

国民学校の時代がくると、その学習内容には変化が見られていくのであるが、この時代の職業教育、実業科の内容の伝えたかった本質は、工業化を担う理学的知識にたった創作と工夫であり、確かな技術も求められていた。学ぶべきものがはっきりしており、生活に即通用する技能であるだけに、自分の性質に不適當であると自身の適正を知って商業の道に進む決心をした者もいる。これは、チャンスを奪うのではなく、むしろ自分でしっかりと職業に対する適正や心構えを持つ教育の当時のよさであったといえる。

のちに、加納小学校勤務時代に中西も述べているが、職業学習的実行的部分を強く感じる当時の手工教育も、普通教育の中で位置づいていくために、一般陶冶的学習要素の厳選が重要となってくる。当時の木工による手工教育の中にあつた、鉋のかけ方一つにしても、大切なものづくりの創造性と、ものに対する扱い、説明ではなく、情操としての美に確かな技術の裏付けがつく過程が知識として獲得されていく大変シンプルなシステムが存在していたように思う。そのためには、指導者としての教員も、高い技術が要求されたのである。

中西ら教師自身も昭和10年頃手工講習会を開いて、工作室で地域の教員の手工教育の技術を磨きあっていたようである。写真5はその時撮影された。また、西小学校の学校日誌によると、昭和11年11月13日手工教育研究発表会が行われ、県内外から多くの人々が来校し、工作室を見学したという²¹。そ

国民学校の時代がくると、その学習内容には変化が見られていくのであるが、この時代の職業教育、実業科の内容の伝えたかった本質は、工業化を担う理学的知識にたった創作と工夫であり、確かな技術も求められていた。学ぶべきものがはっきりしており、生活に即通用する技能であるだけに、自分の性質に不適當であると自身の適正を知って商業の道に進む決心をした者もいる。これは、チャンスを奪うのではなく、むしろ自分でしっかりと職業に対する適正や心構えを持つ教育の当時のよさであったといえる²⁰。

先の山田によると、「手工の発表会するとき自分の作品の横でたっていたら、絶対子供には無理だ。教師の手が入っている。という見学者の言葉に



写真4 西小学校子ども達と作品を囲んで
（中西提供）

の後の火災で当時の資料は見つかっていないが、写真6だけが中西の手元に残されていた。しかし、西小学校の当時の学校日誌と若干の授業記録から足跡がわかる。中西自身が保管していた写真には、当時の手工講習会の主要人物がのっており、その人物が特定できると、当時の岐阜師範学校の手工実践研究の記録として重要であると思われる。また、日本手工教育研究会編『日本手工教育』、手工教育五十周年記念号、昭和10年に載っている勅使河原太右衛門、大村守五、北川久次ら岐阜県の手工実践者、そして、「愛工会」という岐阜県の手工研究会が開かれていた。

昭和15年8月「北斗」²²に、中西は二つの原稿を出稿している。戦争の影響を色濃く感じられる内容になっており、ドイツ国民学校で、模型飛行機工作の作業が必須になっており、その模型に気流検査を行い、機体の重心実験をするなど、科学的なもの作りをとおしての解決学習をしていることを紹介している。

また、巻頭に工作室の写真をいくつか掲載しており、その塗装の写真には、模型飛行機を塗装している様子が写っており、題材の変化を見ることができる。昭和17年頃、高山では、まさに戦闘機を木製で製造していた。プロペラは富山に工場があったため、その他のタンクなどすべて、高山の曲げ木の技術を生かして開発製造が始まっていた。

高等国民学校の意義として²³、

初等科における基礎陶冶を更に徹底し、国民の実際生活、社会生活に即せしめる様実業的陶冶を重視して以て皇国民としての職業生活に対し適切なる指導を行わなければ成らぬ。

と、著している。職業観としては、

国民学校における実業科は、他の実業学校におけるそれとは多分に趣を異にし、技術科や実業家を育成する事を目的とするのではなく、あらゆる職業に対する一般的基礎的陶冶を為す事を目標とする。従って実業に農業を置いた場合でも工業、商業、水産業に関する理解を得しめる必要があり、農業に就いて一層深い知識と技能を得しめるのである。然し農業を学習したからと言って将来農業に従事し、工業を学習したからと言って必ずしも大工や、鍛冶屋や、旋盤工に成らねばならぬ理ではない。要は他日自己に適する職業に従事するも行くとして可ならざるなき職業観と実践力の練成を主眼とするのである。然しながら商業を学習せる児童が、工業に向かうよりは工業を学習せる者が行く方が遥かに適切であることは論を待たぬ。事実過去十数年の結果に徴するに工業学習者にして商業に向かった者は、多くの中途転職をして工業方面の職業につく者が多い。

要するに、実業科では実質的陶冶、実務的陶冶を主として勤勉、正確、綿密、工夫、工案、誠実、信義、敢為、進取等の精神的実践的指導をなし、勤労報国の真正なる職業観を持たしめる様努力せねば成らぬ。即ち職業人として生活して行く為の資質を養成すると共に、日本的正確を



写真5 手工研修会 (中西提供)

左から2人目中西忠節、車輪つきの動物玩具など製作研修。手前には指物師が使用する座式の作業台がおかれている



写真6 手工研究会 (中西提供)

子どもの作品とともに。写真で見える限りとても子どもの製作とは見えない出来栄である

伸展し、以て忠良なる皇国民の育成に努力せねば成らぬ。

と、「国民学校における実業科の使命」として、意見を著している。

高山西小学校時代と、手工教育に対する態度の違いを感じるのは、やはり国全体で切迫した戦争色が増してきたことであろうが、学校が所属している地域の求める職業観や教育の違いと、学習者の求める教育の違いへの戸惑いもあったのではないか。とはいえ、ここでも手工の指導力も認められ、より効率的な、工作室に改良工事の助言を行い、改築が実現するのである。同号の北斗の中の「芸能科工作と我が校の新設備」という出稿に詳しく書かれている。

II-4 中西忠節の手工観と実践のまとめ

本研究で取り上げてきた中西は高山近郊の農村地域で生まれた。そして、地域の教育に生涯携わった実践家である。彼は、スロイドのように作ることが職人の町の子どもたちの「生」に直結する教育として実践してきた。当時高山市でも特に職人の住む町にあった西小学校では、職人になるであろう子どもたちに、専門的な手工教育が行われた。また、その専門的な手工教育が実現した理由は、当時最高の施設を備えていたことでもあろう。西小学校開校百年記念誌への中西の寄稿文を読むと、当時の校長と町長の高い教育に対する知識と理解によって、学校を建設し、校長が教師を集めていったことが伺える。学校建設にこの若い教師中西が関り、莫大な資金を投資し、手工室は完成する。そして、彼は、日々生徒らとその工作室で制作していた。後に、戦闘機の部品作られたほどの施設は、小学生には不必要として壊されることとなる。ともあれ、当時の手工を学んだ生徒たちの中から、多くの名工を輩出²⁴していることは、当時の中西の教育が、子どものその後の人生に深く関わる影響をもっていたと考えられる。

中西の実践は、この手工に固執するのではなく、教育に固執するのではなく、地域の人々、子どもたちが生きていく生活者として、そのニーズにこたえる郷土の経済や産業、教育の問題を熟知し、郷土の教育を目指し、庶民の生活に寄り添うものづくりや教育をこの時代に一貫して行っていた。

一教師がここまで手工教育を実践し、山田をふくめて3人も名工を輩出したことを考えると、子どもと社会との必然的ニーズに当てはまり、教師の確かな教育力、指導力に支えられた成果といえる。理科教師である中西が、郷土化の時代の中で、理科と手工の強化という中央の意向を受け、専修課程において、確かな技術と理念を学んだことが推察される。山田が現在でも当時学んでいた教本の文献名²⁵を鮮明に覚えていたことからはっきりその指導者の人物像が浮かび上がってきた。当時岐阜県師範学校に出向いて講習会を行った伊藤信一郎がそれである。また、この手工科には、当時まで熱心に手工教育研究を続けていた実績があったことがわかっている。

前出の昭和4年「手工科の一考察」のなかで中西は、「制作は自発的態度ならしめたい」として初めの項を書いている。

児童自身の環境、負担に適応した教材の選択をしている。こうして選んだ教材は、「本来受動的である可き課題制作も、発動的たらしめる様にすることが出来る。」こうして、個々によって違った課題を自由制作するが、「勿論此の間に出来るだけ精密な製図を課す事は忘れない。」

という構造的な理解を前提とした確かな手工の基礎を失うことない指導を旨としていたと考えられる。学習動機では創造的に自由手工を取り入れ主体的であろうとしたが、その題材設定が、実に個人的なレベルまで個別化し、また、全て児童自身の計画から製図、制作にいたるまでの手本を写す制作を超えた「自由制作」を実現していた。中西が子どもを単に情操としての教育対象とみなしていたのではなく、実益となる技やものをつくる考え方の中心を教え、生活者、生産者としての構造的、科学的、美的価値観を伝える意思を伺うことが出来る。また「従来行き当たり式の芸術手工や自由手工をやっていると、製図の如きは児童の興味に合わないから駄目だと一蹴されるだろうが、教師の持っている一つで充分面白く行くものである。」という文面からも、創造的手工教育を取り入れながらも、行き過ぎの自由制作主義の反省を促している。この後鑑賞について論及している。が、この点について

は別の機会に紹介する。

前述したが、教え子であった山田は、奉公に行った以後の師匠とは違う感情を中西に抱いていた。生徒時代、以後の指物師の基礎につながる確かな技術を知識とともに教えてもらっていたし、徒弟制度とは違う師弟関係の中に情操的要素、教育的活動があったことがわかる。話の端々に、技術だけでなく、厚い尊敬の念が感じられる。

富岡卓博は、「創作手工教育の芽生え」として中西を岐阜県の手工教育で位置付けている²⁶。勤労教育の理解者であり実践者でもあった野村高山西小学校長のもと、忠節は、理科的手工教育の構造的発展形として、想起から完成までの一貫した工程理解と技術獲得をねらった手工教育を実践したと考えられる。そして、従来の、皆が同じ物を作る教材とは違って、子ども一人一人の工夫を生かそうとした。作ること自体が人生という、山田光郎の中に残っている中西の思い出は、単に技術の伝達の厳しさではない、教育的愛情を内在した厳しさとして「生」を支える部分に存在している。その学習を没頭して行って、「確かなものを教えてもらった。」という実感があるのだ。

山形は、『手工・工作教育被欺史』²⁷の中で、社会政策面でみたり産業でみると近代化のなかで国策のための手工が揺れ動く様が見られるとしている。また、日本手工教育研究会編『日本手工教育』(手工教育五十周年記念号 1935年)をみても、翻弄する様子が描かれている。しかし、当の実践者や子ども、そしてその時代のものづくりの当事者は、創造的なものづくり、手工教育の実践を実現している。翻弄される現代や過去を嘆くよりも、その揺さぶりによって見えてくる教科や素材、行為の本質を見ることが大切である。

この研究は、今後地域の風土、時代の背景との関係性や木というものの時代的存在価値の変化が作用要素として大きな位置を示している。また、自然・社会の現実的立脚点からの理解という特徴から、様々な切り口を持ちえている。

職人や実践者が話す意見自体にフォーカスするのではなく、その背景を取り込んだ上で、明確な自己を内在して意見が言える自我に育てている当時の教育の持つもうひとつの側面を推察することができるのである。

Ⅲ 山下泰助の実践

Ⅲ-1 古川小学校の工作室（動力機械設備をとまなう）

山下泰助は、岐阜県吉城郡古川町の古川小学校に手工室を作った人物で、先の中西より10歳ほど年長と推測される。山下に関する記録としては、大正11年10月開催の岐阜県師範学校附属小学校主催の研究協議会記録²⁸に吉城郡から選出された発表者として「我が校の図画鑑賞教授」と題する小論の掲載文が遺されるに始まる²⁹。その後、『岐阜県教育』に4編の論文が遺されており、掲載年の順に、昭和3年4月「我が校の手工科動力機械の設備」、昭和4年7月「我校に於ける手工科経営の実際<高等科男児を中心にして>」、昭和6年9月「手工動力機械の設備と其使用上の経験」、昭和8年1月「手工科に於ける木材着色に就いて」と続く。この4編の論文のすべてが古川小学校における動力機械設置に伴う論文である。山下自身、余程の自信を持った仕事であり、周囲からも注目されたことが推測される。この間、昭和4年東京高師附属小学校開催の全国訓導手工工業協議会に、岐阜県から附属小の坂本数治訓導と古川小の山下の2名を派遣し「郷土教材」を主題に発表、いわば全国デビューをしている。その関係もあり、昭和6年10月発行のいわば全国誌『郷土化の図画手工』³⁰の巻末に「手工郷土化の諸方面」15頁として、当時のそうそうたる執筆者と肩を並べる形で指導編の一端を担っている。

その山下の掲載論文「我が校の手工科動力機械設備」は、副題に「所要経費3千円」とあり、昭和3年の時代の3千円は今日の600万円相当と算出される³¹。この古川小学校で所要経費がこれほどであるが、先の高山西小学校の場合は、施設設備からするとそれよりはるかに高額な経費がかかったに違いない。この両校は手工室と動力機械を伴った設備をほぼ同時期に前後して完成したようである。ただ、山下と中西が知り合うのは本論のこの後に触れるように、4、5年後のこととなっている。

山形の大正15年の調査³²によると、設備された学校の一覽102校のほとんどが、大阪市35校、東京市24校、金沢市10校をはじめ、大都市に集中している。山下は³³、

境遇的に恵まれない高等小学校の子供に一町村として千円や二千円の費用を投じて、彼等の幸福なる将来を築くことが出来たら其程安い事はない。(中略)機械を使用することに依いて工業上の常識を養うことである。殊に山に取り囲まれている我が郷土としての木工機械に接する事は、どれ位将来の生活と交渉を持つかもしれない。(中略)

よく機械になれることである。初めて機械を運転させた時は恐ろしい様である。そして機械に迫られる様であるが、だんだん使用していくうちによく馴れてくる、そして親しみを持つ様になる。又手細工と機械細工とは余程違ふ、機械を使う能力は手細工では養ふことはむづかしい。

尚動力機械を備付けることは、工業科手工科の気分を高めるといふ点からも大変有効である。と、動力機械の導入について述べている。古川の地域の手工教育を町の後継者に対する強い使命感を以って推進していた様子がわかる。尋常高等小学校の子供たちの、放課まで制作したという当時の反応からして、直接就業に関わることもあり、随分興味深く取り組んでいた積極的な地域環境であったようである。

当時、古川小学校の手工室建設への動きとあいまって、高山西小学校でも手工室が着工された。予算も比較的苦勞なく得られ、施設設備もはるかに大規模なことになる。行政としても、木工による手工教育が、山間地域の産業の担い手としての子供たちに非常に重要な教育と判断し動いたのである。

Ⅲ-2 山下泰助の手工理念

山下の郷土化教育としての手工観は、先に紹介の「手工郷土化の諸方面」という論文に要約されている³⁴。そのなかで、「三 郷土工芸と手工科」「四 手工科の郷土的取扱」には、地方から自力更生していく信念と、それを支える「農民美術運動」の考えが反映されている。この論文で彼は、地元産業につながる、農村に於ける農村生活を充たし美化するために、創作構成的芸術を経済まで立ち上げていく生涯教育を展望した手工科と郷土の関係性を述べている。そして、郷土に積極的に進出していく方法を具体的に示している。それが、1) 材料の採取、2) 製作品の展覧会、3) 製作品の産業化、4) 地方との連絡、5) 参考品の蒐集と陳列、6) 卒業生の指導と郷土工芸品生産組合という項目に分かれている。実際に地域の産業と連携して、産業化している。初期スロイドにも、生徒作品（成績品と呼んだ）の販売を学校経営の費用にも役立てるとするスロイド実現のための理念があるが、この場合は、工費稼ぎというより、やはり地方の産業の立ち上げという要素が濃く、地域に馴染んだものであった。このように地域の中で、工場から講師を招いたり、また卒業後も手工科の授業経験者が、郷土工芸品生産組合として、町の後援の下経営したり、研究生、視察員も設けて、生涯につながる教育を展開・実現していた。山本の「農民美術研究所」での教育との共通点が多くみられることから、山下は、この運動理念を熟知していると考えられる。そして、体制の「農村更生」政策とぴったり寄り添う形で、ユートピア的に地方の新構想として、地方の実践化として、取り込んでいくことが可能であった。山下ら地方の有識者は、地域を美的にも経済的にも向上させる最適な教育として、具体的な方法論を展開できる「農民美術運動」と「手工教育」が当時の教育と経済の国策としての郷土化の中で複線的につながっていった。中西の実業による地域の教育実践のスタイルには、この山下のビジョンが大きく影響していたと思われる。

昭和8年には工作科教員の検定制度に関わって、高山西小学校の中西と出会う³⁵。中西は優良教員として免許を得ている。中西は、20代半ばにして既に在任校に動力機を備えた工作室を設けて、日々授業実践していたのである。そして、同時に、理科実験室も設計し、本人は理科主任でもあった。昭和初期岐阜県高山市で行われた手工教育は、この地域に住む子どもの人間教育としての本質が詰まっていた教育であった。また、中西と子どもとの間には、切実な教育問題として、必然的に重なり合ったところでの教育活動が繰り広げられていたと考えられる。そして、この教育活動は、地域という被

教育者としての子どもの生活社会を視野に入れた内容であった。

Ⅱ-3 『北斗』原稿にみる手工教育観

昭和15年8月「北斗」²²に、中西は二つの原稿を出稿している。戦争の影響を色濃く感じられる内容になっており、ドイツ国民学校で、模型飛行機工作の作業が必須になっており、その模型に気流検査を行い、機体の重心実験をするなど、科学的なものの作りをとおしての解決学習をしていることを紹介している。

また、巻頭に工作室の写真をいくつか掲載しており、その塗装の写真には、模型飛行機を塗装している様子が写っており、題材の変化を見ることができる。昭和17年頃、高山では、まさに戦闘機を木製で製造していた。プロペラは富山に工場があったため、その他のタンクなどすべて、高山の曲げ木の技術を生かして開発製造が始まっていた。

高等国民学校の意義として²³、

初等科における基礎陶冶を更に徹底し、国民の実際生活、社会生活に即せしめる様実業的陶冶を重視して以て皇国民としての職業生活に対し適切なる指導を行わなければ成らぬ。

と、著している。職業観としては、

国民学校における実業科は、他の実業学校におけるそれとは多分に趣を異にし、技術科や実業家を育成する事を目的とするのではなく、あらゆる職業に対する一般的基礎的陶冶を為す事を目標とする。従って実業に農業を置いた場合でも工業、商業、水産業に関する理解を得しめる必要があり、農業に就いて一層深い知識と技能を得しめるのである。然し農業を学習したからと言って将来農業に従事し、工業を学習したからと言って必ずしも大工や、鍛冶屋や、旋盤工に成らねばならぬ理ではない。要は他日自己に適する職業に従事するも行くとして可ならざるなき職業観と実践力の練成を主眼とするのである。然しながら商業を学習せる児童が、工業に向かうよりは工業を学習せる者が行く方が遥かに適切であることは論を待たぬ。事実過去十数年の結果に徴するに工業学習者にして商業に向かった者は、多くの中途転職をして工業方面の職業につく者が多い。

要するに、実業科では実質的陶冶、実務的陶冶を主として勤勉、正確、綿密、工夫、工案、誠実、信義、敢為、進取等の精神的実践的指導をなし、勤労報国の真正なる職業観を持たしめる様努力せねば成らぬ。即ち職業人として生活して行く為の資質を養成すると共に、日本的正確を伸展し、以て忠良なる皇国民の育成に努力せねば成らぬ。

と、「国民学校における実業科の使命」として、意見を著している。

高山西小学校時代と、手工教育に対する態度の違いを感じるのは、やはり国全体で切迫した戦争色が増してきたこともあろうが、学校が所属している地域の求める職業観や教育の違いと、学習者の求める教育の違いへの戸惑いもあったのではないか。とはいえ、ここでも手工の指導力も認められ、より効率的な、工作室に改良工事の助言を行い、改築が実現するのである。同号の北斗の中に「芸能科工作と我が校の新設備」という出稿に詳しく書かれている。

本稿Ⅰでは主に、飛騨地区の高山と古川の2校の尋常小学校に手工教育のうち、特に木工に特化した施設設備が、熱心な二人の訓導の熱意と地域の行政の理解と財政支援によって実現した様子を中心に報告した。

なお本稿Ⅰは、続くⅡに継続する。すなわち本稿Ⅰと次稿Ⅱは一体として扱うため、註の他ほかは、本論全体のまとめ及び参考文献等は次稿Ⅱで記載することにする。

次稿Ⅱでは、昭和8年岐阜県師範付属小学校訓導協議会発表記録「図画ト手工」から、当時の付属小学校の手工科授業計画の木工に関する学年配列の授業内容を検討することで、本論テーマの授業の実際に迫ることを試みる。併せて、本論のテーマの一つ「郷土化」についてもさらに検討する。

註

- 1 中西忠節（1908～2000）。「いさお」あるいは広く「ちゅうせつ」という。大野郡高山町（現在の高山市）出身。理科的な手工の実践家。戦後は飛騨版画の教育を実業的側面にも価値づけ。生涯を地域の生活者として人間教育に尽力。
- 2 山形寛著『日本美術教育史』黎明書房 1967年 p.569
- 3 『漢方』第4096号 大正15年4月22日
菅生 均「大正自由主義教育期の手工教育に関する一考察」建帛社 アートエデュケーション no.26 1996 p.63～64参考
- 4 竹内誠・佐藤和彦・君島和彦・木村茂光編『教養の日本史』東京大学出版 1987 p.248～251
- 5 日本木材工芸協会 京都帝国大学農学部，丸三書店，昭和8年
- 6 石野隆著『児童美術創作手工の実際』集成社 1923 p.24
- 7 鷺山靖「3. 石野隆らによる『創作手工』の出現」佐々有生編著『図画工作・美術教育の理論と実践』現代教育社 2000 p.76～77
- 8 伊藤信一郎は、長崎師範を経て、岐阜師範で教鞭をとっており、その後の岐阜師範の手工科の発展に大いに影響したことを、「手工研究 手工教育50周年記念号」のなかで鈴木孝英が紹介している。また、伊藤の主著である『工業大意』を教科書として、実際使っていたことを、高山西尋常高等小学校で工業科の手工の授業を受けていた第一期生の山田光郎が記憶していた。石原英雄・橋本泰幸編著『工作・工芸教育の新展開』ぎょうせい，1986 p.48
- 9 千島久治は、岐阜県師範学校訓導で全国図画手工教員協議会で「手工における工業趣味養成に就いて」という意見を述べている。前出 山形寛『日本美術教育史』p.582
- 10 作道好男・作道克彦編著『岐阜県の師範学校—その歩みと岐阜大学教育学部』，教育文化出版，昭和60年
岐阜大学学芸学部同窓会第一回總會 岐阜師範学校創立七十七周年記念祝典 記念号附会員名簿』岐阜大学学芸部同窓会，昭和22年
- 11 岐阜師範学校講師。「岐阜師範学校における手工設備の思い出」日本手工教育研究会編『手工研究』手工教育五十周年記念号. 1935 p.106～108
- 12 山形前掲書 p.582
- 13 日本手工教育研究会編『手工研究』手工教育五十周年記念号 1935 p.582
- 14 石原英雄・橋本泰幸編著 前掲書 p.43～48
- 15 昭和34年2月6日飛騨ニュース社の記事には、「大正末期から戦争期まで、飛騨で大先輩の、山下泰助、北平久次氏らと共に、工作科の三羽鳥だった」と記され、さらに「大正末期西校在職中に工作検定を優秀でパス、時の東京高師伊藤教授が氏の素晴らしさに惚れ込んで高師付属校へ引き抜こうとして当時の野村西校長をあわてさせた」とある。
- 16 野村宗男校長は、中西が終生尊敬する教育者と話していた人物である。彼が益田郡の推薦で専攻科を卒業と決定した昭和2年3月、人間教育、職業教育を大切に考えた学校作りを進めるため、20代半ばの彼を理科主任として抜擢した人物であった。当時の直井町長の理解もあり、中西の工作室の計画により、実現することとなったのである。このときの教頭が岐阜師範付属小学校からきた北平久次である。
- 17 富岡卓博「岐阜県における手工教育黎明期に関する史的研究（三）」岐阜大学教育学部研究報告 人文科学第45巻 第2号 1997 p.56～58
- 18 「やまだみつろう」直接話しを聞いた当時の生徒で茶道具指物師、日本の名工の一人である 1915年生
- 19 『西小開校百周年記念誌』高山市立西小学校開校百周年記念事業実行委員会記念誌委員会 2008 p.30～31
- 20 中西忠節「國民學校に於ける實業科の使命」岐阜県女子師範学校付属小学校北斗会誌『北斗n0.33』p.38～43 岐阜県女子師範学校付属小学校出版 1940
- 21 『西小開校百年記念誌』高山市立西小学校百周年記念事業実行委員会記念誌委員会 1996
- 22 前出『北斗n0.33』p.39
- 23 中西忠節「芸能科工作と我が校新設備」前掲『北斗n0.33』p.68～71
- 24 この場合の「名工」とは技能検定制度による技能士で「卓越技能者」として労働大臣及び岐阜県知事として顕彰されている技能士を指す
- 25 伊藤信一郎著『工業大意』
「技術科教育のカリキュラムの改善に関する研究」国立教育政策研究所編「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書(6) p.4～5によると、
(2) 実業教科目（前略）文部省の教授要目案では製図、実習、工業大意で構成されていたが、（中略）実習の内容は木工、金工など手工の内容を軸に構成されており、工業の主たる機械、電気は対象となっていなかった。

- 26 富岡 前掲 p.56
- 27 山形寛『手工・工作教育被欺史』国際学童美術研究会出版 1959 p.1~4
- 28 『図画と手工』岐阜県師範学校附属小学校研究協議会記録第7輯 大正11年
富岡卓博「稀覯本『図画と手工』とその時代の図画教育事情(一)」岐阜大学教育学部研究報告 人文科学
第42巻 第2号 1994 参考
- 29 富岡 前掲書 p.273~275
- 30 山下泰助「手工郷土化の諸方面」『郷土叱の図画手工』学校美術協会 1931 p.225~239
- 31 昭和3年頃の米1俵価格が10円強であったことと、現在米1俵価格2万円程から換算すると、約600万円相当
- 32 山形 前出書 p.585
- 33 山形 前出書 p.585
- 34 山下 前掲「手工郷土化の諸方面」p.229~231
- 35 前出資料『北斗no. 33』p.38~43
- 36 中西も当時を振り返って、「高山西小学校開校100周年記念誌」の中で当時古川小学校の工作教育に優れた山下先生として紹介し、各地を視察して、西小学校の工作施設の素晴らしさをたたえ、後に自校に立派な工作室に改造したことを紹介している。